様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年４月２日現在

機関番号：３５４０４
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2009　～　2011
課題番号：２１５３０８１３
研究課題名（和文）　コメニウス教育思想の現代的展開に関する研究

研究課題名（英文）　Study on the Contemporary Movements of Comenius’s Educational Thought

研究代表者
相馬　伸一（SHINICHI　SOHMA）
広島修道大学・人文学部・教授
研究者番号：90268657

研究成果の概要（和文）：本研究は、冷戦後のヨーロッパにおけるコメニウス研究の動向、および青年期の宗教的テクストや彼の地理的関心といった彼の教育思想のうちこれまで十分にとりあげられてこなかった側面を扱った。青年期の宗教的省察を考慮するとき、コメニウスの教育理念は、自己中心性の外化をとおした開けた魂の実現にあると見なされる。彼は、一般的に学校教育学の先駆者と見なされてきた。しかし、彼のさまざまなテクストには学校外の社会体験を重視する多くの言及がある。ゆえに、彼の学校概念の再検討が必要である。

研究成果の概要（英文）：This study mainly deals with two topics; the trend of Comenius study in post-cold-war Europe, his religious texts in his adolescence and his geographic interest which have not been enough examined. Taking his religious reflection into consideration, the educational idea of Comenius is seen as the realization of open-mindedness (Offene Seele) through the externalization of self-centrism (samosvojnost). Comenius has been generally regarded as a precursor of school pedagogy. However, in his various texts, there are a lot of references which paid much attention to social experiences outside schools. Therefore, it is necessary to reexamine his concept of school.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
平成 21 年度	800,000	240,000	1,040,000
平成 22 年度	600,000	180,000	780,000
平成 23 年度	500,000	150,000	650,000
総　計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学
キーワード：思想史、西洋史、哲学、コメニウス、学校論、近代教育

１．研究開始当初の背景

(1)ヨーロッパ 17 世紀の神学者・教育家であるヨハネス・アモス・コメニウス(1592～1670)は、「あらゆる人に・あらゆることを・あらゆる側面から」という教育の原則を掲げ、とりわけ教育史において、近代的な教授学の祖として位置づけられてきた。しかし、とくに第二次世界大戦以降、先進諸国を中心に学校を中心とした教育問題が増加するなかで、教育の近代化路線が見直されるのにともなって、学校化論者のコメニウスはしばしば批判の対象となった。こうしたコメニウス理解が妥当であるか否かを問うことが、本研究を

着想するに至ったおもな動機である。

(2)こうした問いは、コメニウスの祖国であるチェコ及びチェコに次いでコメニウス研究の盛んなドイツにおいて、とくに 1970 年代から行われており、この研究動向を調査することが必要であると考えるに至った。

２．研究の目的

(1)本研究の中心的な目的は、コメニウスの教育思想の現代的展開、とりわけ冷戦終結後のドイツおよびチェコにおける展開を明らかにすることである。

(2)上記の目的に関連して、とくにチェコ 20 世紀の哲学者ヤン・パトチカ（1907～1977）のコメニウス研究及びパトチカとも親交のあったドイツの教育哲学者クラウス・シャラー（1925～）のコメニウス研究について調査する。

(3)従来のコメニウス研究において必ずしも十分に取り上げられてこなかった側面について考察する。

３．研究の方法

(1)チェコ及びドイツの近年のコメニウス研究に関する論考を収集し、読解する。

(2)チェコ及びドイツの近年のコメニウス研究の動向を調査するため、当地を訪問し、研究者にインタビューを行う。

(3)コメニウスのテクストのうち、従来は十分に取り上げられてこなかった側面を取り上げて、読解の上、考察する。

４．研究成果

(1)研究目的の(1)及び(2)を遂行するため、2009 年 12 月にドイツのボーフムを訪問しシャラー氏にインタビューを行った。また、2011年2月にチェコの首都プラハにある科学アカデミー哲学研究所附属のパトチカ・アーカイブにパトチカの弟子のイヴァン・フバチーク氏を訪問し、インタビューを行った。

①シャラー氏へのインタビューでは、チェコスロヴァキアが社会主義政権下にあり、研究の自由が制限されていたなかで、シャラー氏が西側のコメニウス研究の窓口となり、パトチカと協働しつつコメニウス研究を進めていた細かな状況を把握することができた。

シャラー氏は、コメニウスが教育の歴史のなかでいかに語られてきたかを踏まえた上でコメニウスを再解釈することには、現代的意義があると指摘した。これは私の関心と一致しており、意を強くした。

②フバチーク氏へのインタビューでは、パトチカが 1977 年にチェコの社会主義政権に対して人権尊重を求める運動を起こすなか、秘密警察の過酷な取り調べによって死去した際、フバチーク氏をはじめとした弟子たちが遺稿を国外に持ち出し、それ以降、パトチカの研究がオーストリア、ドイツ、フランスで行われてきた事情について細かに把握することができた。

また、パトチカが 1971 年の論考で「転回の教育学」について素描的に論じて以降、それ以上に研究を深めなかったことについて意見を求めたところ、パトチカの最晩年の研究が結実した『歴史哲学についての異端的論考』には、贈与や回心についての考察が展開されており、これらの言及を教育学的な関心

から考察することに意義があるとのコメントを得た。

③以上のインタビューに基づき、コメニウスのテクスト及びパトチカのコメニウス研究についての考察を経て、ア）コメニウスの教育思想においては、とくに青年期の宗教思想が重要であり、パトチカが直接扱っていない他の文書の研究も必要であること、イ）コメニウスの青年期の考察を踏まえるとき、コメニウスの教育理念は、自己中心性を外化することをとおした開けた魂を実現することにあると見なされること、ウ）本研究によって、自己中心性の克服と他者性の受容をとおした人間存在の開放性という本質的な教育学的課題がコメニウスにおいて展開されていたことを明らかにしたこと、エ）こうした考察を前提とするとき、近代教育批判において、コメニウスが子どもを学校に収容しようとしたという学校論者コメニウスという位置づけには再考が必要であること、が明らかとなった。

この点については、教育思想史学会第 20 回大会シンポジウム「教育批判の思想史的根拠」にシンポジストとして発表し、近代教授学の祖、学校論者としてのコメニウスという従来のコメニウス理解に変更を迫る問題提起を行い、かなりのインパクトがあった。

(2)研究目的の(3)を遂行するため、コメニウスが大衆教育にいかなる関心から取り組んだか、コメニウスの地理的関心と教育の関係はどのようなものであったか、コメニウスが生きたヨーロッパ 17 世紀は「子どもの誕生」の世紀とされるが、コメニウスが子どもをどのように見ていたか、コメニウスとその周辺において公共性の概念がどのように考えられていたかの 4 つの研究を行った。これらは、コメニウス研究にあってこれまで必ずしも十分にとりあげられておらず、これらのポイントから考察することで、コメニウスを現代的関心においてとらえなおす糸口を得ることができると考えられる。

①コメニウスが大衆教育にいかなる観点から取り組んだかに関しては、コメニウスの協働者サミュエル・ハートリブが残した文書を調査した。その結果、当時の宗教対立を克服するための方策として、あらゆる人に教育をもたらすことが主張されていたことを確認した。

この点については、2009 年 8 月にオランダのユトレヒト大学で開催された国際教育史学会第 31 回大会で報告し、一定のインパクトを得た。

②コメニウスは青年期に生地のモラヴァの地図を作成するなど地理的関心があった。のちに教授学の構想にあたって、地理的知識の教授を自覚的に教育内容に含めた。しかし、コメニウスの教育思想の集大成と見なされる『汎教育』では、単なる地理的知識の修得ではなく、遊学の重要性が強調された。この考察をとおして、人生そのものを学校ととらえる彼の学校論の特質が地理的関心の教育的展開にあらわれていることを明らかにすることができた。

③社会史家アリエスは、ヨーロッパ 17 世紀周辺に、子どもが教育対象と見なされるようになったと指摘した。コメニウスは近代教授学の祖と見なされ、事実、子どもを教育対象と見なした。しかし、青年期の著作には、子どもを学校に収容するという発想には明確に距離をおいた言及が見られる。これは、コメニウスを単純に学校論者と見なしてきた従来の解釈に変更を迫るものである。

この点については、2010 年 8 月にオランダのアムステルダム大学で開催された国際教育史学会第 32 回大会で報告したが、従来の教育史のシェマに対する挑戦的な内容を含んでおり、賛否両論であった。

④公共性は教育の理念や制度を考える上で避けて通ることのできない概念であるが、これがコメニウスとその周辺においてどのようにとらえられていたかを考察するため、コメニウスの協働者ハートリブ及びジョン・デ

ュアリの文書を調査し、彼らがコミュニケーションの目的を相互啓発(mutual edification)においており、公共性を私事性と普遍性の媒介としてとらえていたことを考察した。

この点については、2011 年 10 月にコメニウスの生誕地と考えられているチェコ共和国東部のウヘルスキー・ブロトのコメニウス博物館で開催された第 28 回国際コメニウス・コロキウムで報告し、高い評価を得た。

⑤このほか、上記のインタビューや国際学会発表の途上で、コメニウスゆかりの地であるポーランドのレシュノ、ハンガリーのシャロシュ・パタク、スウェーデンのノーショーピンを訪問した。また、ドイツ・ベルリンの教育史図書館、ノルウェー国立博物館、エストニア国立博物館、ロシア東洋学研究所（サンクトペテルブルク）を訪問し、近年のコメニウス研究に関する論考の収集及びコメニウス自身による草稿の閲覧をすることができた。

(3)以上の研究成果については、従来の教育史及び教育思想史におけるコメニウスの位置づけに変更を迫る点も少なくなく、日本の学界においては十分に受け入れられない点もあった。ゆえに、コメニウス教育思想の再評価に関する基礎的な研究に取り組みたいと考えている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）
① 相馬伸一、コメニウス教育思想の再読可能性、近代教育フォーラム、査読有、第 20 号、2011、pp.97-111
② 相馬伸一、2001 年以降の日本におけるコメニウス研究の動向と課題、日本のコメニウス、査読有、第 20 号、2010、pp.64-69
③ 相馬伸一、コメニウスにおける地理と教育――地理教育の思想史的考察の試み――、広島修大論集、査読無、第 50 巻 2 号、2009、pp.23-40

〔学会発表〕（計 3 件）
① 相馬伸一、Mutual Edification and Consultatio Catholica - The Public Sphere according to Komenský and his Colleagues, The 28th International Colloquium of Comeniology, 2011年10月12日, Uhersky Brod Comenius Museum, Czech Republic
② 相馬伸一、The Historical Construction of Childhood and the Educational Thought in European Seventeenth-Century, The 32nd International Standing Conference for the History of Education, 2010年8月27日, Amsterdam University, Amsterdam, The Netherlands
③ 相馬伸一、The Concept of ‘Popular’ and ‘Education’ in Seventeenth-Century Europe through Analyzing the Hartlib Papers, The 31st International Standing Conference of the History of Education, 2009年8月29日,Utrecht University, Utrecht, The Netherlands

〔図書〕（計 2 件）
① 新井保幸、上野耕三郎、坂倉裕治、相馬伸一、高宮正貴、中野啓明、野々垣明子、羽根田秀実、平井悠介、藤井佳世、村島義彦、協同出版、教育の思想と歴史、2012 年、pp.31-48..
② 井ノ口淳三、相馬伸一、山根祥雄、太田光一、小宮芳幸、船越美穂、山崎英則、吉岡真佐樹、加藤聡一、吉田敦彦、岩崎正吾、川口明憲、二文字理明、香川せつ子、ミネルヴァ書房、西洋の教育の歴史、2010 年、pp.12-23

〔その他〕
ホームページ
http://oh39somuch.jugem.jp

６．研究組織
(1)研究代表者
相馬　伸一（SHINICHI　SOHMA）
広島修道大学・人文学部・教授
研究者番号：90268657